

高等学校時代

昭和二十三年～平成二年



第11代校長 高橋 元昭
昭和28.4.1～昭和31.3.31



第10代校長 下村 正喜
昭和24.4.1～昭和28.3.31



第9代校長 鈴木 清一
昭和23.4.1～昭和24.3.31

建設期 昭和二三年～昭和二九年

県立水沢高等女学校・県立水沢中学校・県立水沢商業学校の統合については関係者がそれぞれの角度から討議を重ねていた。昭和二三年三月二八日県立水沢高等女学校と同商業学校の県立水沢高等学校の校舎となる県立水沢中学校校舎への移転がはじまった。四月八日開校式、四月二〇日入学式が行われ、県立水沢高等学校は普通科・商業科の二つのコースを持つ男女共学の統合の高等学校としてスタートした。

一年の在籍数は三十四名であった。この年県立水沢中学校・県立水沢高等女学校四年に進級の予定の二六四名と入試に合格した商業科の五〇名の生徒達であった。

二年の在籍数は六七名であった。これらの生徒は県立水沢高等女学校五年に進級予定の生徒のうち新制高等学校に編入希望の生徒であった。残り四〇名はそのまま県立水沢高等女学校五年に進み昭和二四年三月に卒業した。この年同校は廃校となった。

三年の在籍数は五一名であった。昭和二三年三月県立水沢高等女学校・県立水沢商業学校を卒業した生徒のうち県立水沢高等学校三年に編入を希望した生徒達であった。

県立水沢中学校・同水沢高等女学校三年に進級予定の生徒は併設中学校の三年生となった。この生徒が高校一年に入学した昭和二四年に県立水沢中学校は廃校となった。

統合の概況



▲統合当時の校舎

新しい校舎が竜ヶ馬場に完成した昭和二七年七月二一日、全生徒の移転も完了し、県立水沢高校も本格的にその歩みを始めた。

統合後、三つの学校から集まった教員・生徒の融和を図る問題、その他男女共学・五日制・カリキュラム・生徒指導などの難しい問題が山積していたが、関係者の努力により次第に解決を見、今日の発展の土台が作られていくのである。

中学創設



県立水沢中学校 初代校長
河野 光男
昭和21.4.1～
昭和23.3.31



中学校校章▶

▼県立水沢中学校校舎（及川アイ子氏提供）

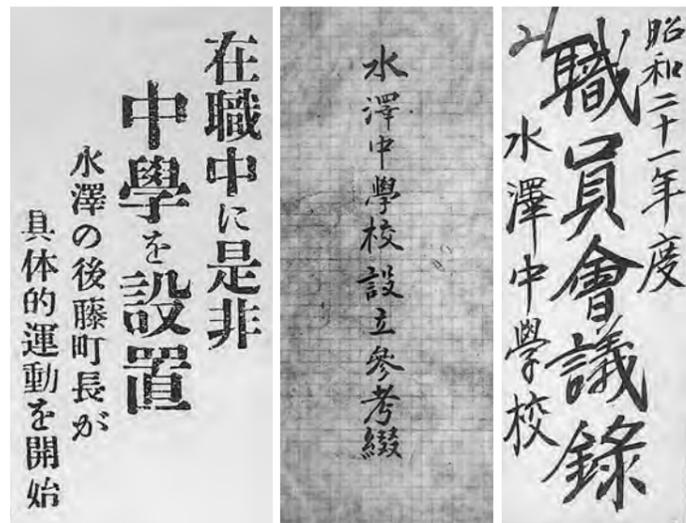


県立水沢中学の創設

県立水沢中学校創設の動きは大正一五年に始まった。昭和一七年県立釜石中学、昭和一八年県立宮古中学が相次いで新設され、県内各地に中等学校設置の運動が起こった。終戦後県立水沢中学校設置の問題が具体化し、地元及び関係者の長年の努力が実を結び、昭和二一年一月三十一日文部大臣の認可がおりた。同年四月一日、元町立水沢国民学校堀の内分校教室（現在の水沢小学校所在地）に県立水沢中学校が開校された。県立遠野中学校（現在の県立遠野高等学校の前身）より初代校長河野光男氏が赴任され、四月一日入学試験が行われた。定員一〇〇名に対して応募者は二二三名に及んだ。一日、入学式と編入式が行われた。水沢出身で県立一関中学校、県立黒沢尻中学校（現在の県立一関第一高等学校、県立黒沢尻北高等学校の前身）二年に在学中の生徒それぞれ二八名・四五名が二年に編入した。戦後の混乱期のことであり、設備の充実・教員確保には苦勞の多かったことが想像される。

昭和二二年、学制改革が行われ町立水沢中学校が設置された。その校舎にあてるために、予算六〇万円で後藤野兵舎（現在の和賀町藤根にあったもの）を解体し、県立水沢中学校敷地内に移転増築をすることになった。

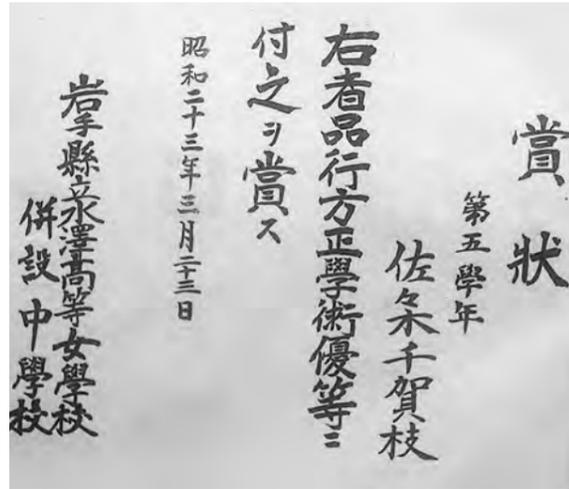
こうして県立水沢中学校は発足した。翌昭和二二年には生徒を募集しないことになった。更に、昭和二三年学制改革により県立水沢高等学校



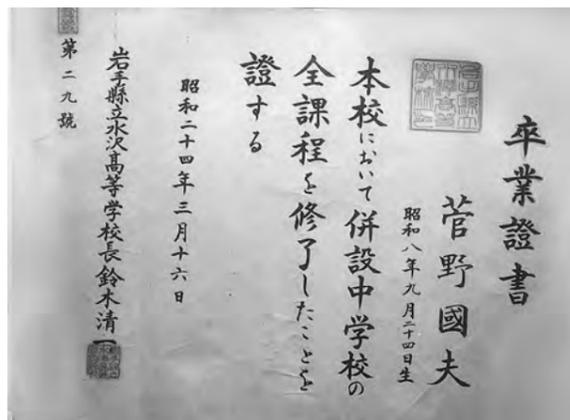
校が設置され、県立水沢中学校は県立水沢高等女学校・県立水沢商業学校と共に高等学校に統合されたが、県立水沢高等学校の併設中学校として命脈を保った。そして生徒が完全に高等学校に吸収された昭和二四年四月一日、誕生後わずか三年で県立水沢中学校は廃校となった。しかし、県立水沢中学校に芽ばえた生徒の自負心と意欲は、無監督の試験制度などと共に県立水沢高等学校にひきつがれ、現在の校風の中に生き続けている。



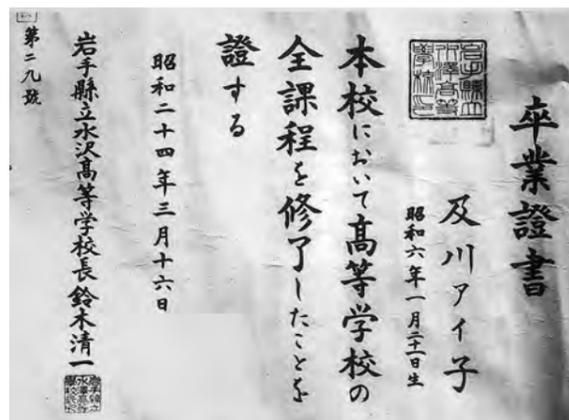
(高橋友子氏提供)



(高橋千賀枝氏提供)



(菅野国夫氏提供)



(及川アイ子氏提供)

戦後の教育

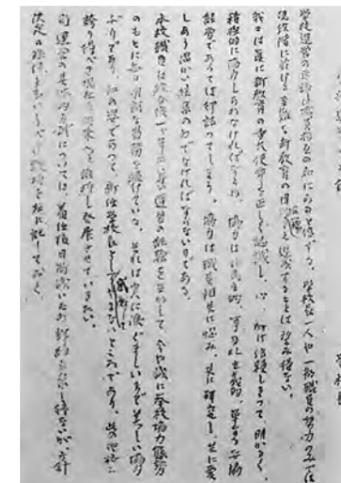
終戦後、日本の国はアメリカの軍政下におかれ、その指示により政治・経済・教育・文化・その他あらゆる面で民主主義的政策がすすめられていった。昭和二十一年日本国憲法が制定され、それに基づいて教育基本法が公布され更に教育委員が選挙によって選ばれることになった。学制改革が行われ六・三・三制が実施された。新しい教育理念に基づいて学校の民主的社會での位置が明らかにされ、P・T・A組織が作られ、学校の効率的な民主的運営が行われ、各種委員会が設けられ、更に生徒の自主的生活の態度を養成するために、生徒会組織の育成とホーム・ルーム・ガイダンスの必要性が強調され、男女共学の制度がおしすすめられた。新しい教育を推進するためにアメリカの軍政部教育課長ダイサート氏が岩手県に配置された。県立水沢高等学校の教育方針も新しい教育理念に基づいたものである。

新制高等学校が発足したばかりの昭和二十三年にはすべての教育環境が土台から作られなければならなかった。混乱と動揺の中でもかくも何事かを始めなければならなかった。同年九月の職員会議で校務分掌の原案が練られ、一月に一応の成案を得た。組織は簡単なものであり、運営研究会と指導委員会を中心として、男女共学、五日制・生徒自治会・カリキュラム・評価方法・通信表・指導要録について検討が重ねられたようであった。校務分掌の組織

は何度も検討され、昭和二十八年の頃になると現在のものになり類似してくる。カリキュラムも昭和二十四年に作られた。選択科目の数が多く、三年間に修得すべき単位数八五単位中四七単位であった。「時事問題」という科目が設けられている点特徴的であった。「父母と教師の会」の会則や「火気内規」など昭和二十四年にいち早く作られた。評価内規なども既に作られているが、昭和二十八年頃になると細部にわたって整備されたものとなる。



校長印



▲昭和24年度教育方針

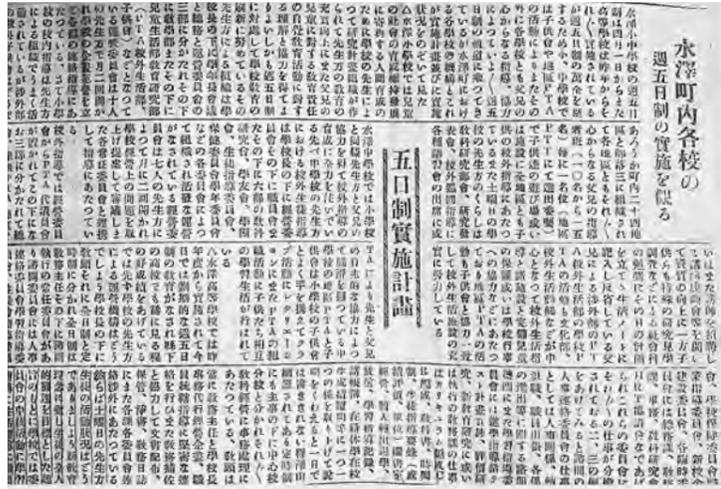
卒業及び修了証書

次ページ下の賞状と証書は、学制改革によって統合された県立水沢高等学校誕生の歴史を説明している。

下段左の県立水沢高等女学校の卒業証書の写真は、昭和二十三年の県立水沢高等学校三年の生徒が同年県立水沢高等女学校を卒業した後、その一部分の生徒が編入したという経緯を物語る。下段右の写真は戦後・戦中の時代に成績のすぐれた生徒に与えられた賞状の写真である。戦後、民主主義的成人教育という観点から、この種の表彰は知育偏重ということで姿を消すこと

▲行事表

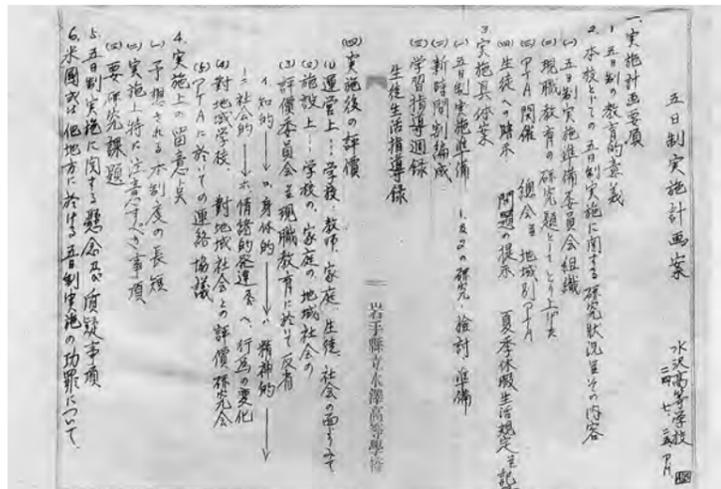
しかし、その後昭和二八年の二学期から六日制に復帰する。理由は生徒の、特に汽通通学生の負担の軽減と土曜日が有効に使われていないということであった。学区制は学校の格差をなくし、地域社会での学校の役割を重視したもので、水沢町、金ヶ崎町、佐倉河、真城、姉体、白山、古城、小山、南都田、若柳、永岡の各村が通学区域で、前沢町、衣川、相去、羽田、黒石、生母の各村が共管通学区域となっていた。(町村名は昭和二四年当時のものである)



(「胆江日日新聞」提供)



(「岩手日報」提供)



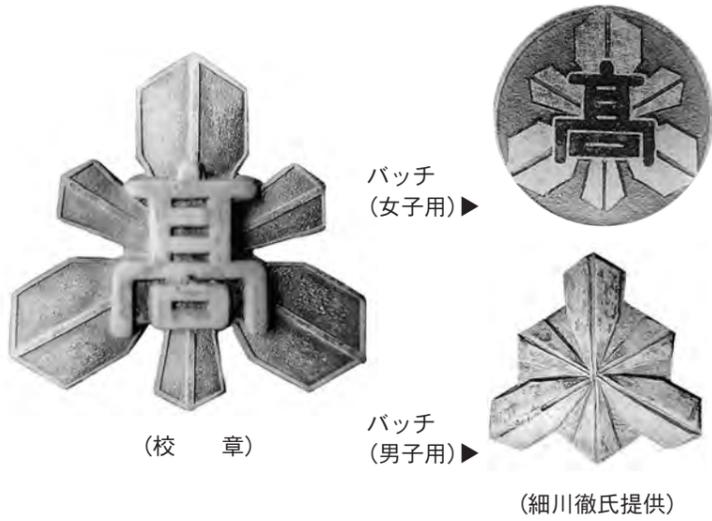
(学制改革・週5日制実施計画案)

校章制定について

昭和二三年統合発足の諸準備のために各校から先生方が何回も打合せを開き、教室の配置や校務分掌の分担などいろいろの問題を大分前から協議したわけですが、その一つとして新生水沢高校の象徴である校章をどうするかということと校章制定のための委員会が設けられました。わたしもその委員の一人であったわけですが、一般から公募することにして募集したのですが、どうも皆の満足するものがなかった。委員の先生方が考案して持寄り決めることにし、わたしも記憶しています。私も三日ばかり考えて図案を作製し皆で持ち寄り検討したのですが、私の考案したものも先生方の気に入らないうことになり、思いもかけず私の考案したものが校章に決まり現在に至っているというわけであり、水沢に生活することになって強く私の気持ちを打ったのは焼石連峰の白雪の景でした。

そこで図案は雪の結晶と水沢の水をもじって作製したのですが、実は三本の矢を組合わせたように図案化したのは、戦後の新しい次代が若き世代に要求しているものとして民主主義の根底をなす「自主的精神」の要求の基本である「科学的精神」、そして雪のように汚れのない「清潔な精神」という三精神を盛り込み現在もそのままになっていることは多少気になっているわけです。

(校章作製者、岩淵慶次郎氏の生徒会誌への寄稿文「校章制定に因んで」より)



(細川徹氏提供)

校歌制定について

校歌・校章を作ろうという動きは創立当時からあったが、昭和二六年七月の学校新聞の論説に「校歌・応援歌を作ろう」という記事(後ろの記事)が載っていることからわかるように、校歌の必要性が強く自覚されていた。翌二七年一月の職員会議で「校歌作成案」が決まり、直ちに活動が始まった。作詞者としては、草野心平氏、高村光太郎氏、金田一京助氏があげられたが、最終的には草野心平氏に決定。作曲は伊藤翁介氏に依頼することとなる。両氏の特段の好意により、翌二八年初頭に完成した。以後この校歌は現在に至るまで県立水沢高校の魂として生き続けている。この校歌制定の交渉は菊池万吉先生が当たった。

草野心平氏談

気持ちよく苦心した。苦心の力作、しかもそれは心のすすむ気持ちのよい詩作でした。「五七」「五七」と進み、それに七七調に変えて抑揚をつけ



▲校章の意義



草野心平氏

竜ヶ馬場新校舎完成

昭和二三年十二月、胆沢郡下町村長会議が開かれ、胆沢郡小山村の二九、〇〇〇坪の敷地に五カ年計画で新設町立水沢中学校校舎を建設することになった。後でこの校舎は県立水沢高等学校校舎にあてられることになった。その後、正式に準備委員会を開き、更に二三年三月に郡内関係町村から設立委員が選ばれ、県立水沢高等学校建設同盟会が発足し、総予算三八九万円(「胆江日日新聞」の記事による)でいよいよ校舎建設にとりかかった。更に一七日の会議で郡内町村の負担額が決まった。一カ月後、水沢町内の募金状況は割当負担額の九七%に達しており、地元の熱意がどれ程強かったかを想像することが出来る。校地の所有者が破格の廉価で土地を譲ってく



▲竜ヶ馬場新校舎

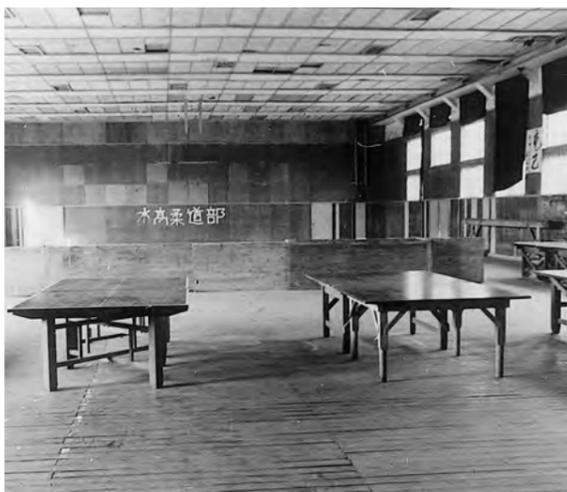
れたり、地元土建業者が犠牲覚悟で協力をした
り、資金募集のために町民一戸あたり一カ月に
三枚ずつ新聞紙を寄贈したり、建設同盟会が中
心となり胆沢郡下の各町村で巡回映画を実施し
たり、水沢公民館で前進座の「ベニスの商人」
の公演をしたり、ダンス・パーティを聞いたり
当時の「胆江日日新聞」には地元関係町村の県
立水沢高等学校校舎建築への努力と願望を物語
る記事が数多く見られる。かくて昭和二十四年六
月二十七日、予算一八二万五、〇〇〇円で北一
棟二〇〇・六四坪建設工事は始まり、同年一
月九日完成、次いで北二号棟二〇五・二〇坪、
附属建築五七・四一坪及び南一号棟二二七・一
四坪が、更に南二号棟二二五・四五坪と南附属
建築五四・四一坪、南三号棟二二三・七五坪、
北三号棟二二三・七五坪、体育館一八〇坪、附
属建築六九・一坪が相次いで完成し、昭和二七
年に全校舎の建築が完成した。ここに名実共に
県立水沢高等学校の基盤が出来あがった。その
後昭和二十九年に、竜ヶ馬場校舎及び敷地は水沢
町より岩手県に移管された。



▲本館建設前の校舎正面

旧体育館建つ

旧体育館建設は既に昭和二十三年に県立水沢高
等学校建設五カ年計画の第三期工事として立案
されていたが、昭和二十六年総工費六一〇万円、
内訳・起債八〇万円、県費補助九五万七、四八
〇円、町費四三五万円で建設されることになっ
た。しかし、この計画に対して水沢町から二七
年に延期してほしいとの要望が出た。建築中の
校舎一棟と旧体育館建設の経費を加えると一、
〇〇〇万円を越え、町では支出不可能だとい
うのである。そこで町議会は起債も補助も返上す
ることになった。驚いた学校側では、P・T・
Aと諮り、町・県当局と折衝を重ね、予算四五
〇万円、内訳、起債八〇万円、県費補助一一六
万三、五〇〇円、町費二五三万六、五〇〇円で
二六年度に着工することになった。町では町費
捻出のため元水沢町警察庁を処分し、三三〇万
円で払い下げた。こうして一八〇坪の旧体育館
が建設されることになった。当初の計画より天
井を一m高くすることで苦勞したということ
がある。廊下・便所を含め二七年に完成した。現
在の姿からは想像出来ないが、当時は県内屈指
の立派な体育館であったと言われる。完成記念
行事を兼ね二七年七月五、六日の両日、全日本
高校バスケットボール選手権岩手県予選大会が
開かれ、男女共優勝の輝かしい成績をあげた。



▲旧体育館の内部



▲旧体育館全景



▲竜ヶ馬場新校舎

グラウンド完成

四〇〇mトラックと野球場を持つ広大なグラウンドは県立水沢高等学校の誇りの一つである。小高い雑木の丘であったグラウンドの整地作業は既に失業対策事業の一つとして昭和二十四



▲整地作業（菅野瑞男氏提供）



▲グラウンド全景（菅野瑞男氏提供）



▲グラウンド開き

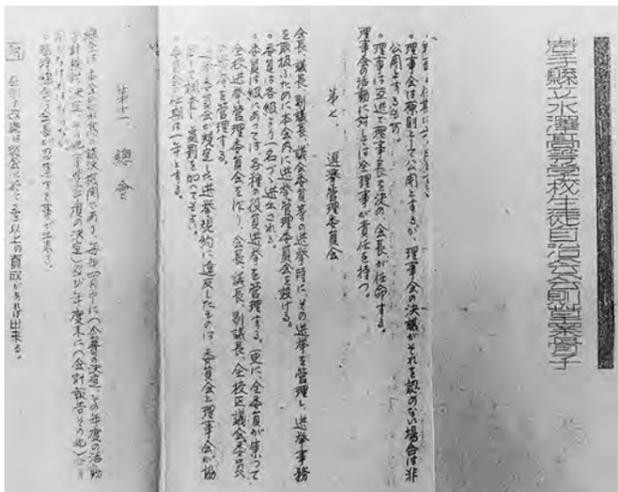
生徒、教師の三者の学力向上、進路についての話し合い、いわゆる三者会談も行われた。生徒も創業の活気にあふれ無監督制の試験を可能にする状態であり、同年七月五日の学校新聞には学習意欲の向上を促すような記事が数多く見られる。授業前朝早く教師の家を訪れ学習をする生徒もいたようであり、盛岡第一高等学校、一関第一高等学校打倒を合言葉に学習に打ち込んだということである。

当時の進学率は男子が六六％、女子が一％であった。昭和二六年三月六日の学校新聞によれば、同年の進学希望者の志望大学は次のとおりであった。東北大学一二名、早稲田大学九名、岩手大学一名、明治大学五名、中央、慶応、一橋、東京工業各大学二名等であった。結果は、東京大学に一名、東北大学に八名合格という成績であった。当時の教職員、生徒一体となつての努力が実を結んだものと言えよう。翌二七年になると進学希望者は前年度の二倍の一〇〇名に増える。更に二九年一月には岩手日報社主催の冬期学力コンクールにおいて一位二位共に県立水沢高等学校の生徒が独占し、また全科目優秀者に一一名が選ばれるという輝かしい成果をあげ、岩手県内でのいわゆる有名校としての不動の地位が確立されたのである。

生徒会活動

生徒の自治活動の育成ということは戦後の教育の大切なねらいの一つであった。昭和二十四年「生徒自治会の会則草案」が作られた。この草

案は生徒の全くの自治組織であった。新しい教育理念がまだ形をもたない当時、教師と生徒の接触には戦前の教育には見られない自由なものがあつたようであり、このムードがそのままの会則に具体的に文章化されている。しかし、その後生徒自身の方から教職員の指導を求める声が強まり、教師・生徒が一体となつた自治活動を推進しようということになり内容的にも大幅に改正された。その後、生徒の竜ヶ馬場校舎への移転がすすむにつれて、その都度改正がくりかえされた。全生徒竜ヶ馬場校舎への移転が完了した昭和二七年、生徒会は実質的に初めて一つにまとまり、生徒会活動も活発化していく。翌二八年生徒会会則も従来のものが集大成され、現在の生徒会会則の骨組が出来てきた。この年度、生徒会誌「みづこう」の創刊号が発行された。内容の形式は現在のものに相当類似している。紙の質は悪く、印刷もよくはないが、内容はかなり高度であり、「自由の学園」としてのムードはいたるところにあふれている。



▲昭和24年作製の生徒自治会会則



▲昭和25年作成の生徒会会則の草案

から始められた。竜ヶ馬場校舎に移転した生徒は体育の時間には教師と共にグラウンドの整地作業を行ったとのことである。教師・生徒一体となつて汗と泥にまみれて作業に従事する姿は、創設期の県立水沢高等学校そのものの姿を象徴するものであつたかもしれない。昭和二六年八月、グラウンドの整地作業は一応完成し、同年九月三日、グラウンドの完成を祝い、失業対策事業に従事した人達の運動会、芸能祭が開かれた。更に同年一〇月二〇、二一日、町と共催でグラウンド完成、使い始めを記念して「グラウンド開き」の式典が挙行された。同時に郡中学校・県南高等学校の陸上競技・野球・サッカー・ラグビー・バレーボールの各種大会が開催された。こうしてここに運動部の今日の発展と体力作りのための基盤が築かれた。

学習態勢整い、成果あがる

昭和二三年新制高等学校として発足以来二四年には検討を重ねた結果カリキュラムも一応完成し、教職員も揃い、学習態勢は着々と整っていった。創造の意欲に燃える学校全体の雰囲気の中で、二五年になると学力向上のためにいろいろな手がうたれた。進路別学級編成、一年間の授業内容を二学期までに完了し、三学期はその復習に当てるとか、夏休み、冬休み期間中の課外授業、年二回の実力テスト、月第四週日の数学、英語のテスト、一関一高との対抗学力コンクール、冬休みを短縮して二月二十九日までの授業継続、合宿勉強会などである。更に父兄、

商業科の分離独立

昭和二七年旧県立水沢商業学校同窓会から商業科分離・独立の声が高まった。県教育委員会の意向を打診した結果、独立・分離の問題は地元熱意次第だという返事であった。その後、二九年三月の県議会で商業科の分離・独立が承認され、一学年一〇〇名定員の六学級の水沢商業高等学校が四月から発足することになり、新学制のねらいの一つであった統合の原則が破れていく。



(「胆江日日新聞」提供)

▼水商分離独立にともなう寄附金募集趣意書

岩手県立水沢商業高等学校
分離独立に伴う 寄附金募集趣意書

謹啓 時下早春の砌り、御父兄の皆様方には念々御清榮の御こと、御察し致し、心から御慶び申し上げます。

扱て、本日茲に標記事項に関する運動の経過を御知らせ致すと共に、本運動が今春四月を期して實現されるか否かは實に、この募金成績如何にかつてゐることを御了承願ひ度いふに至りました。見届けたる御情を御察し、私達は情勢を検討した結果、その額を同盟會負担金壹百万円以上と決定したのであります。

之に依り去る一月二十六日期成同盟會役員會を開催して先ず金壹百万円の募金計画を樹立検討し左記一、に示すが如き分担の決定を見るに至つたのであります。

依而PTA負担額金拾貳万五千円に關し去る二月十九日開催の商業科PTA總會に相諮りましたところ出席者の皆様に満場一致を以て御決議を戴いた次第で御座居ます。

何卒右私達の趣旨を御察察下さいまして奮つて御賛同賜ります様切に御願ひ申し上げます。

記

一、募金目標金壹百万円也

内訳 水高商業科PTA 金十二万五千円也
水商同窓生 金四十万円也
水高商科卒業生 金四万五千円也
水澤町内一般寄附 金三十万円也
その他 金十三万円也

二、商業科PTA寄附金額
一人當り金五百円以上のこと

三、締切日
現在校三年生分は二月二十四日まで
現在校一、二年生分は二月二十八日まで
水沢商業高等学校期成同盟會
會長 佐藤郁二郎

水高商業科PTA各位殿

躍進期 昭和三〇年～昭和四四年

概要

戦後の混乱はこの期の前半で完全に立ち直り後半は経済の高度成長、産業の発展と相俟って日本がひたすら人類の平和を願ひ、その一翼を担って世界に貢献した時代といえる。

三四年には教育テレビが視聴覚教材の仲間入りをし、東京タワーが完成して修学旅行のコースになった。コンピュータが生活に入ってきた。

第一七回オリンピックの火はローマからついにアジアの日本に渡り、三九年科学のオリンピック第一八回大会は東京で世界の若人を集めて開かれた。こうした反面戦後のベビーブームは高校・大学の門を狭くし入学難は深刻化した。高校においては学科の増設をはじめ臨時学級増、財団法人による高校の新設などによって緩和策がとられていった。大学においては募集定員の臨時増や新設大学の設置が次々と認可され、急増による入学難は解消されたかにみえたが、年々高まる進学率には追いつけず二年三年と浪人する者が出た。

一方就職者においては、産業界が活気を取りもどし、好景気が反映して就職難から求人難へと変わって行った。

こうした世相の中で、本校においては商業科が分離して県立水沢商業高等学校となつて独立したのをはじめ、水沢で高校総合体育大会があり、PTA育英部が水高に誕生した。また本館が竣工し、同窓会は母校に校旗を贈った。三四年には緯度観測所長池田博士の「地球観測年と南極観測及び人工衛星について」の講演を聴く機会に恵まれ、めまぐるしく変貌して行く社会の理解を深めることができた。生徒会はモットーを作成し、体操部は一〇連勝の輝かしい記録を打ち立てた。日報コンクール・旺文社テストなどの活躍もめざましく水高の躍進は日を追って高まってきた。

カリキュラムの改訂

文部省は昭和二九年一二月高等学校カリキュラムの改訂について三一年度第一学年から学年

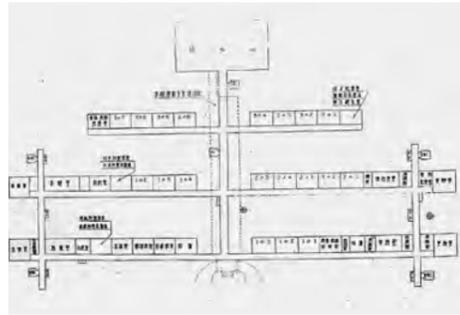
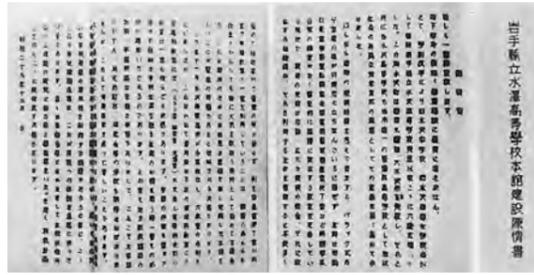
進行をもつて改訂カリキュラムを実施することを知した。

更に昭和三八年度に高等学校カリキュラムが改訂され、基本方針は、それぞれの課程、学科を生かした教育を実現できるようにすると共に生徒の能力・適性・進路等に応じて適切な教育を行うこと。普通科においては、教育の片寄りを少なくするために必修科目を多くすると共にその内容を精選充実し、基本的事項の学習が充身分身につくようにする。例えば社会科においては五科目全部を、理科でも四科目を全部必修とし、芸術、外国語の科目も必修に加えた。

生徒の能力・適性等に応じて教育を行うため古典・世界史・地理・数日・物理・化学・英語については、それぞれA、B(古典は甲乙)の二科目を設けて履修させた。



校旗
本館が落成し創立50周年を迎えるにあたり、同窓会が記念事業として昭和33年3月に寄贈したものである。赤の塩瀬に金糸で中央に校章が刺繍され、金糸入りの房がついている。旗首には校章を配してある。



▲陳情書に添えた本館建設計画図

た。そして一月一五日、二階建クリーム色の本館が、ひととき高く美しい姿をあらわした。玄関の上に取り付けられた一m余の雪の徽章もそれ程大きく感じられなかった。



▲昭和29年2月（高7回卒・鈴木慧氏撮影）



▲昭和29年2月の生物教室(左)・物理教室(当時3年生・鈴木慧氏撮影)



▲旧校舎本館



(昭和31年度入学生から)

当時の体制
商業科は昭和二九年四月一日付をもって分離独立して岩手県立水沢商業高等学校となった。実質上校舎を別にしたのは二月二日であった。この日は、文化祭の第二日目であったが、九時半から体育館で別れの式を行った。
両校長の挨拶のあと、生徒の代表が別れの言葉を交わした。
昭和三十一年四月、高橋校長の後任に牟岐校長を迎えたが、それもつかの間九月には県教育委員に任命されるという事態となった。これを知った生徒会は、全生徒の願いをこめて留任を懇請したが、そのかきもなく水沢駅頭に牟岐校長を見送らなければならなかった。
安彦校長は一月二〇日付で発令になり、その間は寺田堯郎教頭が校長事務取扱でその任に当たった。



第14代校長 松島 真蔵
昭和35. 4. 1 ~昭和38. 3. 31

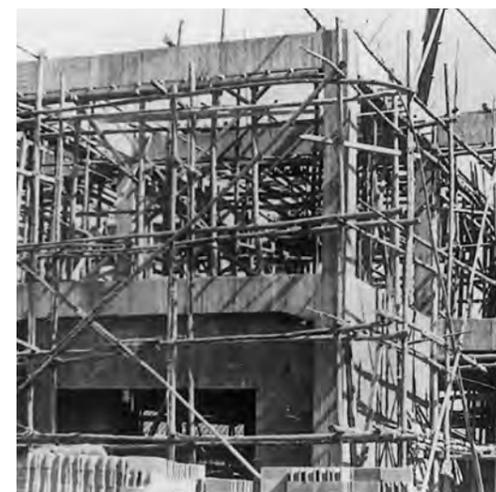


第13代校長 安彦 専一
昭和31. 11. 20 ~昭和35. 3. 31



第12代校長 牟岐 詰雄
昭和 31. 4. 1 ~昭和31. 9. 30

待望の本館建築



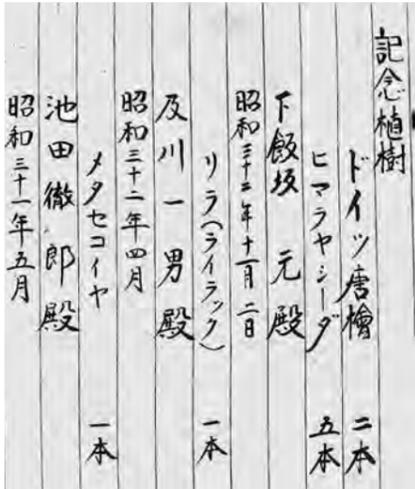
▲建設中

昭和二九年一二月のPTA総会において本館建築について協議し、満場一致で建築することを決定した。
ただちに促進委員会を結成し、陳情書を作って関係方面に請願陳情。
総工費七〇〇万円(本館五〇〇万円・附属施設二〇〇万円)を県費から二五〇万円、PTAで二五〇万円、それに一般寄附、同窓会寄附で一〇〇万円が見込まれ、残りを市町村特別寄附をおおぐこととした。
募金は文字どおり東奔西走となったが、関係各位の深い理解と協力によって三二年五月一日には盛岡で入札が行われる運びとなった。
六月一日に起工式が行われ、槌の音が授業中の校地内に響き渡った。待望の建築が始まった。

植物園について

二万九、〇〇坪という広大な面積をもって
いる本校に植物園造成の計画が出されたのは昭
和三〇年であった。これの促進を図ったのが三
一年三月卒業した第八回生である。ブルドー
ザーによる整地計画も順調に進んで、まず五月
には校門の左側一五〇〇坪に桜・ドイトウウヒ・
ヒマヤスギ・イチヨウ等卒業生から贈られた
四一種類に及ぶ苗木が次々と植えられていった。
またグラウンド周辺にはつつじ、体育館付近の
五〇〇坪にはポプラやカラマツが植えられた。
この造園には水沢宮林署・六原農場などの協力
を得て二年間で全部の植樹計画を完成した。

記念植樹に際しては、特にも池田徹郎氏から
贈られた幻の植物といわれる名木メタセコイヤ
があつて、まさに植物園のエリートにふさわし
く、天空に向かってめざましい成長を遂げた。



▲記念植樹寄贈目録

自由の学園

「自由」おそらく本校ほど自由の許されて
いる学園は少ないだろう。師弟の間柄におい
ても、上級、下級の生徒関係においても自由の追
求が許されている。我々青年が真に求めるすべ
てのものは、これに含まれていると言つていい
過ぎではないだろう。

その自由が我々の学園の中に、若々しい緑の
空気となつて、みなぎっているのである。我々
はこれを生活の意識や行為の中に大切に生かし
ていかなければならない。そして五体の隅々ま
で情熱と共に充分にそれを吸い込みたいものだ。
しかし自由はそれ自身を直接追求できるもので
はない。如何に追求すべきかを誤つてはならな
い。誤ることは逆に我々から自由が奪われるこ
とになるのだから。

(みづこう五号巻頭言から)



▲県土木部瀬川技士の設計による斬新なデザインの新校門(第7回生寄贈)



▶ 台布付襟章
(学年により台付の色
が赤、黄、緑となる。)

▼新体育館に携額されている本校 motto



生徒会で motto を作成

(四〇年度)

三九年度後期生徒会長及川晃から motto 作
成が提唱されたのは四〇年の二月であつた。総
務委員会はただちに作成を決定した。校内には
「我等の手で motto を」のポスターが貼り出
され、大要次のような序文とその目的を書いた
 motto 応募用紙が全校生徒に配布された。

序 文

多様化され、高度化されている現代の社会に
おいて多くの人は片寄つた自分に気付かないこ
とが多い。学校生活においても激しい競争の渦
に巻き込まれ「感じる」「考える」「話す」「行
う」という時間が少なくなつてきている。自己
の内的充実、集団生活の秩序というものには縁
遠い学校生活になり勝ちである。

生徒会とは真に我々の姿を追求する場であら
ずはならない。誰もが関心を持って参加でき、
自己を鍛え、集団生活の秩序を身につける場であ
らなくてはならない。それがために私達は今、水
高生としての意識の統一をはかり永久なる水高
精神の伝統となるものを私達の手で築こうでは
ないか。

目 的

水高生徒としての精神の伝統を築き学校生活
を充実させる。
応募した二〇〇の motto の中から「真・善・
美の探究」が選ばれ各クラスにその賛否を求め
たが具体性に乏しいという理由で全体の三分の

二に満たず否決された。

六月の総務委員会では更に「友愛・清新・気
魄」を加えた案をつくり一〇月八日の生徒総会
に提出したが保留となつて再度検討を迫られた。
一二月一三日の臨時生徒総会では四案が提示
され、結局前の二案の決戦投票となつて、十カ
月の長きにわたつた motto 審議はここに漸く
終止符を打つて誕生することができた。翌年の
一〇月二一日、掲額式典が行われ、吹奏楽部に
よる「祝典マーチ」の演奏される中で、待望の
除幕が泉田・山本の二人の手によつて行われた。

生徒会 motto

「友愛・清新・気魄」の成立

「水高生徒会は果たしてこのままでいいのだ
ろうか」という思いが昭和三九年度後期生徒会
長及川晃等の胸の内に強く生じた。そして、二
月中旬水高生としての精神の伝統を築き、毎日
の生活の充実を目的とした motto の応募ポス
ターが校内に展示された。すると約二〇〇の応
募があり、その内から二〇が昭和三〇年度前期
生徒会(会長及川晃)に引き継がれ、「友愛と協
調」「真と善と美」「気魄と創造」などを基に原
案の作成がなされ、入念な検討の後、最終原案
として「真・善・美の探究、友愛・精神・気魄」
と「友愛・精神・気魄」の二案が同年度後期生徒
会(会長泉田守司)十月の総会で投票の結果、
わずかの差ではあるが「友愛・精神・気魄」に
決定されたのであつた。

この生徒会 motto は、校歌にあるように「真

生徒総会で志気高揚の決議文

(三一年度)

昭和三十一年一二月二日生徒会臨時総会が聞
かれた。生徒会費値上げなどの案件が原案どお
り可決したあと、只野康夫生徒会長は水高生の
意気を高揚し、高校生としての自覚を新たにす
る意味で、次のような決議文を読み上げた。

決議 文

自由により自主的に積極的に思索し、活動すると
いうことは、私達の学校の善き校風であり、伝
統でありました。そしてそれを真に充実させ発
展させていく事は私達の使命であると思ひます。
そのためには私達は撥らつとした意気をもつと
共に強い責任感と時には強固なる意志による自
己抑制が必要だと思ひます。

私達は、この酷寒の時にも激しい労働に従事
している中学校時代の友人のある事を想ひ浮べ、
私達高校に学ぶ者の幸福とその責任の更に重大
なことを自覚し、いささかの非難をも受けるこ
とのないよう、そして全校一丸となつて今後輝
かしい校風の樹立に一段と努めることを誓いま
しょう。

右宣言決議する。

昭和三一・一二・二二

岩手県立水沢高等学校生徒会臨時総会

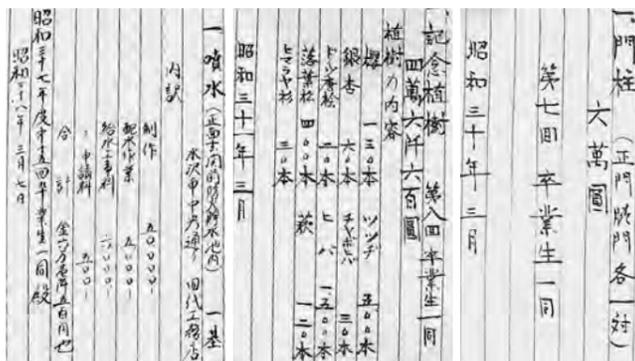
応援歌・逍遙歌など

昭和二十三年、旧制の中・女・商業の三校が合併して新たに水沢高等学校が誕生して以来、応援歌や逍遙歌などが、青春の日々の支えとなってきたが、以下その歴史を振り返ってみる。

県立水沢高等学校としての発足当時は、校歌は勿論、独自の応援歌は存在せず、商業学校のそれまでの応援歌が歌われてきたが、新しい応援歌が求められ、それに応えて英語教師の阿部庄一郎先生が「霜忘れたる玉ゆらに」で始まる応援歌を早速作詞された。曲は旧制松本高校からのもので、現在は第一応援歌として六〇余年に亘り現在まで歌い継がれている。又、青春の多感な想いそのものの「胸に描きし甘き夢」の逍遙歌「逝く春」も同先生が作詞され、曲は旧制松本高校の寮歌「春寂寥」を借用したものである。

現在「選手を送る歌」として歌われている第二応援歌「あみちのくに名の高き」は昭和二十九年四月、商業科が県立水沢商業高校として分離・独立して旧商業学校の応援歌などを持ち去ったため、応援歌は一つだけとなり、これではならじと、当時三年生の高橋正男が原案を作詞、それを国語教師の高橋正男先生の指導の下、同級生の鈴木慧と共作したものである。

また「水高讃歌」見はるかす大グラウンドには、これも前述の阿部庄一郎先生が作詞され、高畠由貴子が作曲したものであり、後に曲が変わっている。



▲卒業記念品目録

「彼さかしくも逸れるか」の第三応援歌は、もっと応援歌が欲しいという要望に応え、国語教師の杉山清先生が作詞し、音楽教師の小笠原勇美先生が昭和三四年に創作。

第四応援歌「大空飛び交う若鷺に」は昭和四六年に応援団が全校生徒に向け募集したときに二年生の萩田清・三原祐一の両君が共作し応募採用となり、前述の小笠原先生が作曲したものである。

また「春の胆沢の若葉のかけでよ」の「水高音頭」は昭和二〇年代半ばに生徒有志による作詞で、曲は旧制某高校の寮歌とのことである。この他、運動会の際流された「運動会行進曲」は昭和五五年三年生鈴木順によって作曲。残念ながら作詞者は目下不明である。また、優勝歌は旧制二高の優勝歌である。

女生徒の制服制定

夏の制服ブラウスが三〇年五月に制定になっ



▲舗装前の大鐘道路30年頃

充 実 期

昭和四五年～昭和六三年

概 況

この二〇年間は、科学の進歩がめざましく、新素材の開発、ハイテクなどに代表される先端技術は日常生活にも変化をもたらした。昭和四三年GNP自由世界二位となった我が国の経済は、その後のオイルショックなどの試練を経ながらも順調な成長を示し、豊かで恵まれた社会の訪れを告げた。「デイスカバー・ジャパン」の示すようなレジャーブームを謳歌する世相は、海外旅行熱へと飛火した。

社会の情報化、高齢化も進んだ。反面、こうした繁栄の裏では、環境汚染や生活環境の悪化が問題化してきた。教育の世界でも、いじめ、校内暴力が頻発し、教育の荒廃の様相を呈し、抜本的な見直しを迫られた。昭和四四年、共通一次試験の導入は大学入試の大改革であった。その後も入試制度は変更されたが、幸いにも本校では適正な対応がなされ成果をあげてきた。

本校においては、長年の悲願であった新校舎の建設をはじめ、中庭・テニスコート等々の総合的環境整備が進み、理想的な学園づくりが行われた。「環境は人をつくる」の言葉どおり、昭

たが、三七年には改めて制定されている。冬服については、三二年制定以来現在に及んでいる。

卒業式に拾う

母校の数々の卒業記念品

竜ヶ馬場の校舎に移ってからは広い校地に恵まれたが、それだけに学校環境の整備は容易ではなかった。卒業生はこのことに心をくだし、毎年記念品を贈ってその充実に協力した。また在校生は卒業を祝い、メダルや校章入りの風鈴等を贈って門出を祝った。



生徒会がおくった卒業記念メダル



▲「岩手日報」昭和41. 2. 11付 (第19回卒業生)

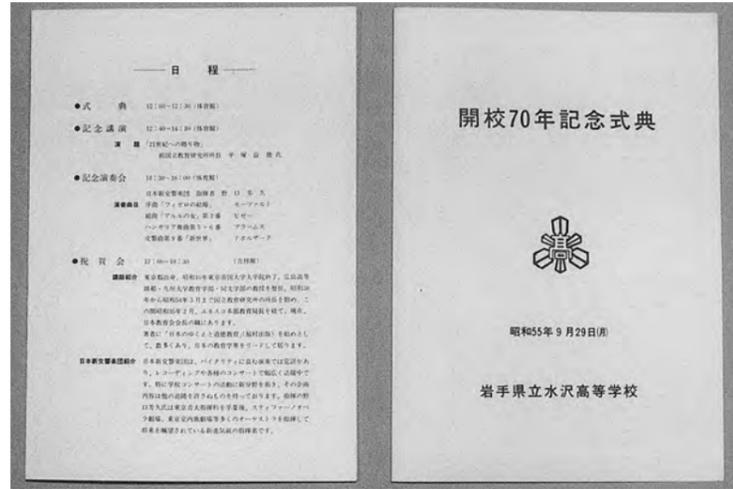
和六三年の国立大一九九名の合格、新体操部の二二回連続優勝など、まさに充実の期間であった。



水高の歴史を語る大時計



旧校舎



▲式典のしおり

昭和五五年の開校七〇年の記念事業は、「昭和五二年の校舎落成にともなう盛大な事業を行った直後のことでもありますので、グランド整備とその完成を祝っての校内体育祭、記念講演会及び演奏会、同窓会における会員名簿の改訂発行など、質素な中にも実のある事業を行って、本校の発展を祈る」(記念式典のしおり、堀川英校長の挨拶より抜萃)ものであった。

創立七〇周年

創立六〇周年は、式典の挙行と記念会館の建設、「水高六十年史」を発刊することを記念事業とした。
創立六〇周年をむかえた昭和四五年六月二一日、創立六〇周年記念式典および記念会館落成式典」が新体育館で盛大に挙行された。午後には祝賀会が催され、高総体連続優勝を誇る新体操部が演技を披露し、同窓生が校章の雪を表現する琴を演奏するなど、六〇年の伝統と会館の完成を祝い合った。

記念事業・行事

創立六〇周年



▶天皇陛下の崩御と平成の幕開けを報道する新聞各紙



▲「21世紀への贈り物」と題して記念講演をする平塚益徳先生

式典に引き続き開かれた講演会は、前国立教育研究所所長の平塚益徳氏を迎え、「二十一世紀への贈り物」と題して行われた。「二十一世紀の発展は科学の発展である。これは教育と研究の成果の結晶だ。まもなく迎える二十一世紀は、人類の長い間の願いである戦争を止め、平和のための教育・科学・文化の追求が課題であり、その基礎を築くのは諸君たちか

記念講演

記念式典・祝賀会

開校七〇年記念式典は、昭和五五年九月二九日正午から本校体育館で約一、二〇〇人が出席して挙行された。祝賀会は吉祥閣で催された。



▲60周年を伝える「岩手日報」と水高新聞第70号



昭和四二年の同窓会幹事会の席上、クラブハウス建設の話題が出され、急速に具体化した。一口一、〇〇〇円で一、二口を目標に募金活動が展開されると、PTAも全面協力を決定し、記念会館の写真を表紙にした式典のしおり

記念会館建設、造園

岩手国体は全県下五二にわたる会場で各競技が行われた。水沢市は弓道、馬術、ボクシングなどの競技会場となり、中でも弓道は水沢高校がその会場となり、選手、補助員として本校生徒が活躍した。

岩手国体

国体弓道 水高会場となる

昭和五五年二月から着工したグランド整備は、排水工事、野球場の良質土入れ替え、砂場の造成、鉄棒の移設、ハンドボールコートの整備という、総合的で大規模なものであった。

グランド整備記念事業

式典行事の最後は演奏会で行われた。日本新交響楽団(指揮野口芳久氏)の演奏する、序曲「フィガロの結婚」、組曲「アルルの女」第二番、ハンガリア舞曲第五・六番、交響曲第九番「新世界」の四曲に魅了された。

記念演奏会

らの二十一世紀への贈り物である。そのためにも、あくまでも勉強しよう。また、本当の楽しみは簡素の中にある。思いは高く暮らしては簡素に、を生活のモットーに」と話され、生徒らも熱心に聴き入った。

新体育館の南側に、総工費一、八六七万余円をかけて、建坪五六四㎡(一七〇、八坪)、六〇八〇人を収容できる各種附帯設備をもつ合宿所、視聴覚学習や合併授業のできるホールからなる鉄筋二階建ての近代的会館が完成したのは昭和四五年六月である。また枯山水の記念造園がなされ、心をいやしてくれる。



▲水高60年の歩を集大成した初めての記念誌



◀完成したプール



▶木造校舎を背景にして行われた第1回校内水泳大会

新校舎の設計プランは、日進建築工芸（江刺市）の手によって明らかにされた。その内容によれば、たくさんの植え込みに

新校舎決定

校舎の老朽化による施設設備の悪化は深刻で、学校を始め、PTA、同窓会、教育振興会などに校舎新築問題を喚起させた。新築に関する県への一回目の陳情は、昭和四四年に行われたが、この陳情は時期尚早ということで不発に終わった。しかし、昭和四七年には、校舎新築期成同盟会が発足、その年の九月にはその実現をかけた二回目の陳情がなされ、この陳情以後校舎新築が具体化されることとなった。

昭和四八年一〇月の県議会において校舎新築予算が承認され、水高関係者の願いが現実のものとなり、昭和四八年一〇月一日起工式がとりおこなわれる運びとなった。昭和四九年、第一期工事により普通教室棟が、昭和五〇年、第二期工事及び第三期工事により特別教室棟が、それぞれ完成し、昭和五二年の第四期工事、管理棟の完成をもって一切の旧校舎からの移動を終えた。長きにわたる伝統と数多くの生徒たちの思いの化身とも言える旧校舎は、この時点ですべて解体され、新たな水高を象徴する新校舎と、同時に進められていた環境整備事業の完了を機に、まさに水高の新時代の幕はきって落とされたといえる。

新校舎の建設の経緯と概要

校舎の老朽化による施設設備の悪化は深刻で、学校を始め、PTA、同窓会、教育振興会などに校舎新築問題を喚起させた。新築に関する県への一回目の陳情は、昭和四四年に行われたが、この陳情は時期尚早ということで不発に終わった。しかし、昭和四七年には、校舎新築期成同盟会が発足、その年の九月にはその実現をかけた二回目の陳情がなされ、この陳情以後校舎新築が具体化されることとなった。

昭和四八年一〇月の県議会において校舎新築予算が承認され、水高関係者の願いが現実のものとなり、昭和四八年一〇月一日起工式がとりおこなわれる運びとなった。昭和四九年、第一期工事により普通教室棟が、昭和五〇年、第二期工事及び第三期工事により特別教室棟が、それぞれ完成し、昭和五二年の第四期工事、管理棟の完成をもって一切の旧校舎からの移動を終えた。長きにわたる伝統と数多くの生徒たちの思いの化身とも言える旧校舎は、この時点ですべて解体され、新たな水高を象徴する新校舎と、同時に進められていた環境整備事業の完了を機に、まさに水高の新時代の幕はきって落とされたといえる。



▲風雪の害や視力障害の実情などが陳情請願の有力な資料となった

旧校舎解体

新校舎建築にともなって、その役割を果たし終えた木造の旧校舎は、多くの人々の胸に限りない思いを残しながらその姿を消すこととなった。

「内務班の丘舎」「肋骨校舎」「ボロ校舎」などの異名をもつ旧校舎は、水高関係者の精神の中にそのすみかを移すことになる。



総合優勝の原動力となった高校女子チーム



▲競技の運営に協力する高校生

諸施設の充実

（昭和四五～四七年）

食堂を備えた記念館・プールの完成

施設設備に関して、昭和四五年から四六年の間は、新校舎への期待とその具体的模索がなされた時期であった。しかし現実のものとするには困難で、身近な設備の充実が計られた。

この間に、開校六〇周年を記念して設立された会館（現在の水龍館の位置に建てられていた二階建ての合宿所。水龍館と同規模）に食堂の設備が整えられ、職員、生徒ともに親しまれた。また、昭和四六年の八月には待望のプールが完成。夏の期間における体育教育をより充実させるものとして大いにその期待が寄せられた。この完成によって、同月生徒会に水泳同好会が発足、さらに翌四七年七月には第一回校内水泳



施設・設備

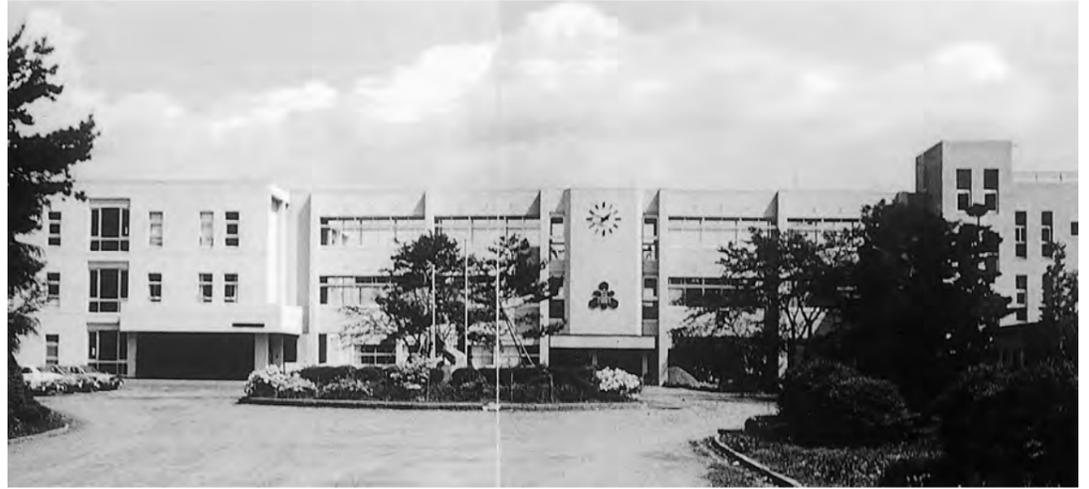


▲60周年記念記念館に食堂が開設

大会を実施、閑静な木造校舎を背景に生徒の歓声が午後のひとときを埋めた。最深部約二mもある名物プールということで生徒の関心も大きく、施設を有効に活用しようとする生徒の意気込みが十分に感じられる行事であった。

地道ながらも確実に充実してゆく施設設備の歩みは、そのより大きな発展を期待する潜在的な原動力の歩みのようにも感じられる時期でもあった。

新校舎完成



校舎全景

と、部員生徒は独立した部屋を得たことに、改めて喜びを感じた。

吹奏楽部練習場は、同窓会により「奏龍館」と命名された。

文化部室

文化部室は、二つの棟からできていた。新棟には、奇術研究同好会・ESS部・漫画研究同好会・文学同好会・史学同好会・映画部・演劇部。旧棟には、応援団リーダー・フォーク研究同好会・美術部が部室を構えていた。

文化部室とは誰も呼ばず、「文化部長屋（なごや）」の愛称で親しまれた。春の運動会では、その準備作業場として、生徒の「欠くべからざる場所」となっていた。

卓球場

旧体育館があった頃は、照明等不備な点があったが常時四台のコートを確保していた。旧体育館解体後は、旧校舎の二教室を与えられた。しかし、これでは男女の練習も十分に出来なかった。しかたなく市の体育館を借用したり、時には、生徒が自発的に公民館等の練習場をさがし求めて、胆沢町、前沢町へと渡り歩くというジプシー生活が続いた。

完成した卓球場（白竜館）は、国際的規格コートが四面とれる県下に例を見ない専用の卓球場である。部員達は「逆境時代の先輩達のひたむきさを本校卓球部の礎として、この恵まれた卓球場を真の意味での道を求める場にしていき

落成式挙行

新校舎建築工事及び同窓会、教育振興会が推進してきた数々の環境整備事業の完成にともない、昭和五二年一〇月二二日、本校体育館において盛大にその落成記念式典が挙行された。落成式は、県教育委員会と学校が主催し、祝賀会は水沢市長を会長に、同窓会、PTA、教育振興会を中心とした地域の関係者で構成した祝賀協賛会が主催した。

新装なった水高に改めて寄せられる信頼と期待に応えるにふさわしい記念すべき一日となった。



い」と決意を新たにしました。

テニスコート

石川 嘉信（当時庭球部顧問）

七月二日は朝から小雨で緑を増した、はてん木もけむって見えていた。その日、造成を終えた六面のテニスコート開きが、多くの関係者、協力者参列のもとに挙行されました。雨のために新コートではなく、体育館でのものではありましたが、生徒、とくにテニス部員の喜びはそのために弱まるものではありませんでした。（中略）造成に当たった業者の話では高校でコート六面を校地内に持つ学校は全国にもないのではないかといいことでした。体育の授業や必修クラブ、クラスマッチ、部活動等で存分に動き回っている生徒を見て、良かったなあと思うのが素直な感想であり、また、六面を擁してもなお余りある竜ヶ馬場の広大な校地を確保してくれた先人の先見の明には本当に頭の下がる思いです。（PTA会報「昭和五二年十月」）

第二体育館完成

昭和四二年に建設された体育館（第一体育館）も室内競技の多様化のために手狭となり、待望の第二体育館が完成した。

この体育館での練習の成果により、昭和六二年県高校総体で男子排球部は優勝を手にした。

諸施設完成と環境整備

柔剣道場

格技の重要性が叫ばれ、全県下の高校に格技場の建設が続く中、本校の柔剣道場は、昭和五年に完成した。

当時の部活動は、床の不安定な旧体育館で行われていた。新校舎建設に伴い、旧体育館解体のため、旧校舎の三教室が柔道部、剣道部、卓球部に与えられた。教室での練習は、生傷が絶えなかった。建設場所選定は、体育の授業で生徒が一斉に竹刀を打ち鳴らし、本校舎での授業を妨害しないようにという配慮と、校地内の立木の伐採を考え、現在の地に建設された。

吹奏楽部室

従前の吹奏楽部の練習場所は、旧校舎被服室であった。楽器の保管場所であった体育館（現第一体育館）から練習場までの楽器の運搬は毎日大変な作業であったという。この運搬にあたっては、いつも楽器の破損に注意を払い、また練習開始まで、被服室の机、椅子等の整理に余分な時間を費やすという状態であった。このような状態も新しい部室が建てられたことにより解消。

新部室は新校舎の南西の木立に囲まれた場所にあり、「チューニングの際の音に気兼ねすることもなく、大いに練習に精を出すことができる」



（昭和60年2月完成）

「大学入試改革」共通一次試験

国民の高等学歴志向が、所得倍増高度経済成長に刺激されて受験競争を異常に加熱させて、学校教育に大きなひずみをもたらした。大学入試が高校以下、ひどい場合には、小学校、幼稚園までの教育をゆがめ、一貫する入試競争をゆがめていると目された。大学間の格差、その序列化が世の学歴偏重傾向と結びついて不必要な競争を生みだし、青少年の精神と身体に悪影響を与えているとみられ、大学こそ、そこへの試験こそ、教育における社会の元凶とされた。

大学入試の改革については、昭和四六年「中

教審」答申に改善の方向が示されてから、長年にわたって研究され、試行テストを数回重ね、昭和五四年から国民注視のなかで実施されたのが、共通一次試験（正式名称Ⅱ「国立大学入試選抜共通第一次学力試験」）である。

この改革に伴い、本校でも逸早く進路指導課を中心として対策委員会が設けられた。その一環として、父母の理解を求めするために、「共通一次研究会」が父母と学校側とで開催された。当時の進学指導課長より「共通一次」が出た理由は①大学間格差の是正、②一回の試験だけで合否を決定することの改正、③高校の学習の達成度を見る適切な問題の作成、④学歴偏重の是正などが挙げられた。それに対して参加した父母からは①「共通一次」は、どのような方法で行われるのか、②教科、科目について、③試験日が三月から一月に移行するに伴う問題点はどうか、④「二次試験」の科目数と対処等について積極的な質問が相次いだ。

この国立大学入試改善・共通一次については、慎重な経過を経て作られたものであったが、二次試験及び合否判定などについての実験結果もなく、未知なことから学校、受験生、保護者共々、まさに暗中模索の出発であった。共通一次試験は、昭和五四年より平成元年度まで続いた。その間、本校では教師と生徒、父母が一体となり大学入試に取り組んできた。

開校以来の新記録

昭和六三年

三度決勝で涙を飲む、準優勝を手にしたのである。六一年にも勢いはとどまることを知らず、山岳部女子はインターハイ五位、男子バレーボールは一五年ぶりの優勝を決めて歓喜に満ちあふれ、女子テニスは三度目の団体優勝、インターハイ全国ベスト一六位の活躍。女子バスケットボールは雪辱なつて優勝。四本の優勝旗をならべることとなった。

六二年には、女子バスケットボールが二連覇、ウエイトリフティングが二年ぶり二度目。山岳部男子がインターハイで堂々の三位、弓道部男子もインターハイへ。予選を突破し決勝トーナメント二回戦に進んだのである。

六三年は、山岳女子、ウエイトリフティングがインターハイへ。野球は三位と、とどまることのない快進撃を続けることとなったのである。

文化 部

昭和四五年、科学部化学班の日本学生（読売）科学賞最優秀賞で始まったこの充実期は、やはり、大学進学への結実となつて昭和六三年へと続いているといえようか。個人の記録ではあるが、黒沢由紀の英語スピーチコンテストでの東北大会での優勝もすばらしいものである。前年である六二年には、「カールの再分化について」という題で「耐高塩濃度変異種作物を作る」研究を発表した科学部生物班が、日本学生科学賞の最優秀賞を受賞しているのは、四五年と結びつけてみると不思議な因縁さえ覚える。

国立大学A・Bグループ分け、二次出願前の自己採点などの入試改革二年目、足きり、補欠合格者の減少と、各大学とも昨年よりは対応に落ち着きが見られた。しかし弱肉強食といわれる入試制度の本質は変わらない状況でありました。このような中で、本校は学力向上対策、情報の適確な分析提供、生徒諸君の努力が功を奏し、開校以来の成果をあげることができました。

国立大合格者数二〇八名と初の二〇〇名の突破を果たし、実人数でも一二〇名と一〇〇名台に初めて乗りました。また東京大、京都大、大阪大、筑波大、東京外国語大各二名、東北一六名、東北地方での各大学での大量合格など質・量ともに県内トップクラスの成果を挙げました。

〔PTA会報〕昭和六三年七月

水沢高校 八〇周年までの部活動

はじめに

昭和四五年、岩手国体開催の年。まさしく充実期と呼ぶにふさわしい文武両道を実践した活躍の年であった。

それは、昭和六三年の、進学における開校以来の記録をおおかた塗りかえる成果と、野球部第三位、山岳部女子の大阪インターハイ出場、

数々の文化部の受賞の記録、三年に一度公開される「大文化祭」の歴史はこの場ではとても詳細を述べることはできない。

特筆すべきこととしては、文化部活動の中に、映画作りを続ける映画部、漫画の制作まで行う漫画研究同好会、老人ホーム慰問、文化祭で注目の視線を集めるマジック研究会、ひとにぎりのユニークな個性派集団「仏教の教典を読む会」などの活動があることである。

それが前向きであり、なんらかの「自己実現」を目指す目的ならば、生徒の生み出す創造的な文化活動はすこやかに育てたい、というのが、水高の基本理念なのである。

平成初期の概況

激動といわれた「昭和」の時代が終り、新時代が幕を開けた。天皇陛下の崩御と新天皇の御即位を受けて、昭和に代わる元号が平成と改まった。

世界の動向は、ソビエトのペレストロイカを始めとし、東欧諸国における民主化の波、平成二年（一九九〇年）一〇月、ベルリンの壁が取り壊されてドイツ統一の実現はヤルタ体制・冷戦時代の終わりを告げることとなった。しかし一方では、アラブの盟主を目指すイラクが、八

ウエイトリフティング二年連続三度目の団体優勝・インターハイ出場の活躍とも呼応する。

運動部 第一期黄金時代

昭和四五年は、男子バレーボール・女子新体操・女子弓道・男子山岳の四つの部が優勝旗を奪い、インターハイへの出場を決めた。まさしく黄金期と呼ぶにふさわしい。

それは、女子新体操が大垣ソノ先生に導かれて県内大会二連覇を成し遂げる昭和四九年まで続くのである。

昭和四六年には、女子バスケットボール・男子バレーボール、四七年には、女子弓道、四八年には、男子軟式テニスが団体戦初めての優勝。そして、その勢いで、東北大会での優勝をも達成することとなるのである。奇しくも決勝戦は高総体での関一との再戦となった。

第二期黄金時代

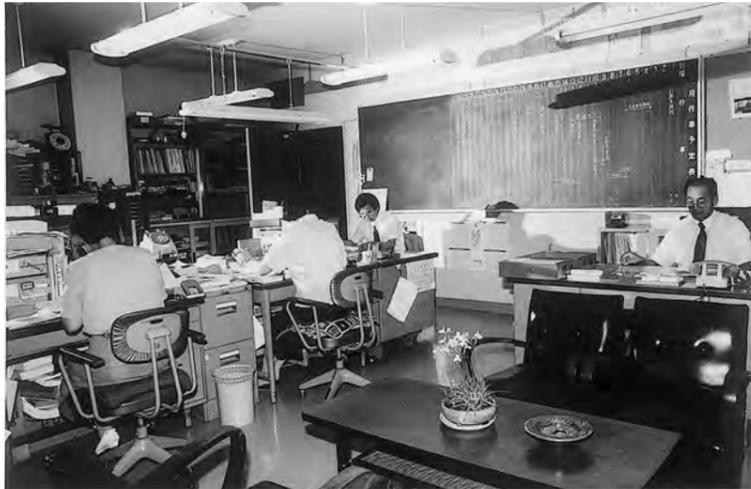
昭和五九年に序曲が奏でられ、六〇年に第二期黄金時代に突入し、それは六三年まで続くのである。

五九年、女子テニスの二年ぶり二度目の団体優勝。山岳部女子のインターハイでの三位入賞がそれである。

六〇年、第二期黄金時代の主役の感さえある、ウエイトリフティング部の念願であった団体戦初優勝。山岳部女子の連続出場でのインターハイ第一位。また、女子バスケットボールは惜しくも準優勝。そして、野球部は夏の大会で、

月クウェートに侵攻して併合宣言を一方的に行った。それに対し国連を中心にイラクに対する経済封鎖と米国軍及び多国籍軍の派遣となり新たな緊迫の度を強めている。日本は国連の役割を果たすべく湾岸諸国への経済援助を行うとともに、国連への平和協力法案を国会に提出し、





▲執務中の事務室

金賞を獲得し、全国大会（全国高等学校総合文化祭―山梨大会）に出場するという本校初の一大金字塔をうち立てた。この全国大会には、美術部からも絵画一点の参加があり「水高文化」のレベルを内外に示していた。平成元年に演劇が県大会出場、E.S.Sが東北英語弁論大会において、二年連続第一位の最優秀に輝いた実績は、まさに特筆されるものであった。また写真部・書道部の入選、音楽部の連続出場の記録、文芸部の小説・詩部門での入賞と大活躍であった。



▲生徒会室

平成元年前期生徒会長 及 川 剛 宏
 毎年二年生は、自分達の代表として活動を進める生徒会役員や応援団リーダーを選出することになる。しかし、立候補者がなかなか現れず、例年、総務委員が中心になって選出のための話

難航する役選・リーダー選

生徒会



▲平成2年7月総会

自衛隊の派遣について審議を開始した。
 この時代にあつて生徒は、国際化・国際交流を活発に行い、西ドイツとの交流、アメリカへの留学、「ロータリーの翼」派遣と多様に展開しだした。
 進学校という名の下に受験戦争といわれる全国的な規模での対応の中で、本校は着実な躍進を遂げている。平成二年三月、大学に進学した水高生は四一四名（浪人含む）（現役進学率九三%）で県下では上位の進学率を誇っている。また生徒の活動は、友愛・清新・気魄をモットー



▲第一体育館全景

に、バスケット選手権で県優勝し東北大会出場を始めとし、バレー男子の準優勝、ウエイトリフティングの優勝、軟式庭球、柔道そして卓球とインターハイに駒を進めている。平成元年から女子サッカー同好会が誕生し各種の大会に出場した。平成二年の選手権では県大会で優勝し、初の東北大会出場を成し遂げた。
 一方文化部では、吹奏楽部が県大会において



▲職員室朝会風景



▲「自画像」佐々木淳子

本校からも初めて県代表となった吹奏楽部（部員五十三名）が、山梨県民文化大ホールの舞台で、思う存分に演奏し、高い評価を得た。同じく美術部から自画像の絵画が出品され、好

評を得ていた。さらにもこの大会で選ばれた演劇・日本音楽・郷土芸能部門が国立劇場において発表するという名誉が与えられている。

文化のインターハイ

平成二年度

全国高等学校総合文化祭



第十四回全国高等学校総合文化祭が八月一日から山梨県甲府市を中心に開催された。文化のインターハイといわれるこの大会は、「はばたけ創造の翼 いま 山梨の空に」を高く掲げ、全国から一万五〇〇人の高校生を集めて十一部門にわたる舞台発表及び展示部門の発表が行われた。岩手県から全種目に参加し、いずれも県大会において最優秀賞及び金賞等を獲得し、県代表として全国大会に出演・出品しているものであった。



▲応援団リーダー

し合いを行っている。この話し合いは時には数カ月にもわたり、学年全体や男女別、各学級や有志というあらゆる単位で、放課後、屋上や教室においてなされる。その内容は、候補者を選出することだけでなく、意識調査等も行いながら、生徒会や応援団の在り方そのものまで深く追究しようとするに及んでいる。近年、生徒会では執行部と一般会員の隔たりや、活動に対する会員の無責任・無関心が強く指摘されている。一方応援団については、バンカラのスタイルや厳しいリーダー養成、また下級生への応援歌等の指導の仕方などに対して、改善の必要があるのでは、という声もあがっている。立候補する人がなかなか出てこないことの理由としては、たとえ役員やリーダーとなっても、皆から十分な協力が得られないのではないかと、という不安があるようだ。また各々の毎日の生活が勉強と部活動で精一杯で、更には他の活動をするだけの余裕がないことも挙げられる。しかし実のところは、できれば面倒なことはしたり考えたりせず、誰か

に任せて、自分の好きなことに没頭したいという人が多いように思われる。実際、話し合いに参加さえしない人も残念ながらいるのである。こうして役員・リーダー選は難航を極めるのだが、話し合いは殆ど生徒自身の自主性によって行われることや、これらが生徒会や応援団というものを真剣に考え、学年の真の協力体制を確立しようとする重要な機会となっていることは特に意義のあることだと思ふ。最後に、結局はやる気を持って立候補する人が現れること、また、役員にはならなくても「有志」として影で支えてくれる人達も大勢いることを記しておきたい。



▲ウェートリフティング競技出場（吉田、郷右近、小野、佐藤）

全国高総体（宮城）

八〇周年記念事業

記念式典（一九九〇年）

平成二年一〇月七日（日）

会場 水沢高校体育館

祝賀会会場 吉祥閣



▲創立80周年記念式典



▲地鎮祭、起工式（平成2. 3. 12）



▲「感謝のことば」野田生徒会長



▲創立80周年記念館「志学館」

八〇周年その後

平成三年～平成二二年



第24代校長 雨海 重利
平成2. 4. 1～平成4. 3. 31



第25代校長 岩淵 弘
平成4. 4. 1～平成6. 3. 31



第26代校長 澤田 弘
平成6. 4. 1～平成8. 3. 31



第27代校長 佐藤 基
平成8. 4. 1～平成10. 3. 31



第28代校長 佐々木昭治
平成10. 4. 1～平成12. 3. 31



第29代校長 高橋 満
平成12. 4. 1～平成14. 3. 31



第30代校長 石田 奉昭
平成14. 4. 1～平成16. 3. 31



第31代校長 佐々木繁夫
平成16. 4. 1～平成20. 3. 31



第32代校長 伊藤 勝
平成20. 4. 1～平成22. 3. 31

自主自立の人間づくり

真善美を常に求め、自主自律の精神と創造建設の気魄に満ち、友愛と信義を重んずる心身ともに豊かでたくましい人間の形成を図る。

一 真理と正義に対する旺盛なる探求心を育成し、学問尊重の気風を高揚し、高い学識を涵養する。

二 自主自律の精神と連帯奉仕の態度を培い、情操豊かな品位ある人間を育成する。

三 健康で、強靱なる身体と意志を陶冶し、勤勉にして責任を重んずる態度を養う。
これは、水沢高校の変わらぬ教育目標である。今に至るまでこの教育目標のもと、生徒たちは学業、部活動の両面で自己実現に向かって努力を重ねてきた。

学校行事

変遷の概要

主要な行事については大きな変化はない。四月の応援歌練習、五月の運動会、六月のクラスマッチ、七月の野球応援、八月末～九月の文化祭（文化発表期間）、一二月の修学旅行、一月の予餞会といった行事は、かなり古くから続いているものであり、水高生の自主自律の精神を涵養する上で大きな役割を果たしてきた。
これ以外に変遷のあった行事について見てみ

よう。

まず、四月一五日の開校記念日に従来行われていた「完走会」は道路事情のため平成三年を最後に姿を消し、代わって各界で活躍している卒業生によるそれまでの「同窓生講演会」が平成六年からは「開校記念講演会」として行われるようになり、平成一八年以降は通常の授業日となった。また、九〇周年を境に、予餞会が無くなり、「飛龍祭」が毎年公開開催となった。
夏季（七月）と春季（三月）に行われていた「大学講座」は、本校の視聴覚機器が充実したこと、大学入試の環境が変化したことなどから、平成九年には「サテライト講座」に衣替えした。その後平成一〇年中頃から徐々に予備校講習にシフトして、現在では二年生の春季（三月）と三年生の夏季（八月）に予備校の講師を招聘して、志學館で国・数・英の講習を行っている。

運動会

毎年五月の第二日曜日開催の水高運動会は、伝統ある行事として地域社会からも温かく見守り続けられている。生徒の活動も四月早々から各役割分担を始めとして、生徒会を中心に準備が開始される。一年生も入学後応援歌練習が終わると息つく暇もなく、カップ踊りや棒倒しの練習に駆り出される。その他の生徒たちも紅白応援練習や係の準備作業、三年女子が音頭をとって全校で棒倒しメンバーへの差し入れなど、めまぐるしく動き回る。水高伝統の有志の精神がここでも発揮されている。

運動会といえば、シンボルと陣地のバック絵が印象の方が多いと思う。係と有志とで密かに学校に泊まり込んで完成させた思い出をお持ちのOBの方々もたくさんいらっしゃる。平

思うが、現在はシンボルは廃止されている。平成十八年度に、それまで連綿と続いた伝統的なシンボルが姿を消した。理由はいくつもあるが、大きな理由としてはやはり生徒の負担が大きかったという第一に挙げられる。毎日遅くまで、下手すると泊まり込む生徒もおり、保護者の心配も一人で、担当職員もつきあって泊まり込んだりして作っていたのであった。また、運動会会場は野球グラウンドの外野部分であるが、運動会後の復旧整地はするのだが、シンボルが立つフィールドグラウンドと右中間部分の土地がどうしても低くなり、練習試合中に他校生の選手がそのトラップにかかって転倒するなどのアクシデントもあり、危険であるとの理由も大きかった。シンボル廃止後はそれに変わる旗を紅白それぞれで作り掲げることとしている。
水高運動会の名物競技はなんといっても棒倒しであろう。棒も平成二〇年度には新調された。現在では競技ルールも厳正化されている。平成一〇年代の前半に現在適用されている競技ルールが完成された。昔は怪我に直結しなければなんでもありみたいところがあり、仮に怪我をしても恨みつこなしといった暗黙の紳士協定があつてそれで済んでいたが、どうもやはり怪我が増え、高総体前の大切な時期に致命的な負傷者も出たりなど、やはり怪我を回避することが

急務とされたようだ。このルールが適用された後も、やはり怪我人は皆無ではないが、その数は随分と減少したそうである。一部の保護者や教職員からも危険性の指摘は毎年のように提起されるが、苦しい練習を乗り越えて一致団結して競技に臨み、試合後は勝ち負けに関係なく、さわやかに互いの健闘を讃え合う生徒の姿を見るたびに、水高からこの競技を無くしてはいけないと、密かに思うのである。



ケットボール（男女）、バレーボール（男女）、卓球（男女）、フットサル（男）、逃走中（希望者）である。昔から変わらず続いている競技もあり、時代を反映した競技もある。因みに、個人エントリーの「逃走中」というのは、ごく簡単に言うと、陸上部員が鬼役を務める鬼ごっこである。制限エリア内で制限時間中に鉢巻きを鬼に取られないように逃げおせれば勝ちとなるゲームである。かなり以前から続いていた「下駄（靴）飛ばし」に変わる個人競技で、平成二年度に実施が試みられた。なかなかの好評であったと聞いている。

以前は、三年生が上位を独占し、一部競技で二年生が食い込むという図式で、一年生の活躍の場が無かったのだが、ここ数年は一年生も上位に食い込む競技が出てきて、なかなか目の離せない試合が増えてきている。

また、いつ頃から始まったものか定かではないが、クラスマッチに合わせて各クラス毎に統一したユニフォームをそろえるようになっていく。基本的にTシャツやポロシャツであるが、クラス毎にそれぞれ趣向を凝らしたシャツをそろえて、開会式や閉会式ではなかなか壮観である。もっともこれは町中を来て歩く代物ではないので、生徒から無理矢理購入を迫られる担任たちには頭を抱える向きもある。

しかし、この行事のおかげでクラス内の意思疎通も一段と活発になり、お互いに知らなかった一面を垣間見たりして、本当の意味でホームルームができあがると言っても過言ではない。



クラスマッチ

毎年六月下旬にクラスマッチが行われている。週五日制が始まる以前は土曜日を使い、二日半の日程であったが、現在は二日間で行われている。

競技種目は平成二二年度のものを挙げると、ソフトボール（男女）、ドッジボール（女）、バドミントン（女）、ソフトテニス（男女）、バス



飛龍祭（文化祭）

九〇周年、平成二二年度以降から毎年開催となった飛龍祭も、生徒会が先頭に立って全校が盛り上がる大きな行事である。開催時期は現在では八月の最終日曜日を公開とする日程で調整される。夏休みが明けると間もなくの開催となる関係で、生徒たちも夏休み前から準備を進めて公開当日を迎える。

特に平成二二年度が本校の創立百周年に当たるので、平成二二年度と二二年度の二カ年は水高の歴史に焦点を当てた研究発表が一年生を中心に行われた。平成二二年度には水高の歴史と水沢の三偉人の研究発表。平成二二年度は、より詳細に「校歌の歴史」「歴代校長」「部活動の歴史」「購買の歴史」「校舎の変遷」「応援団の歴史」「水高出身の著名人」などのテーマに沿って調べ学習とその発表展示を行った。

二、三年生は例年はそれぞれの企画をしている。例年二年生は、自主制作映画や迷路など学園祭で定番となっている娯楽系の企画をし、特に理数科は課題研究の展示や科学実験を披露している。また、三年生は食堂と出店の企画運営をし、その収益金で野球応援のメガホンやクラスマッチの道具など、学校行事で使用するものを購入して活用している。

最後の大きな生徒会行事でもあり、三年生にとってはこの後は完全な受験体制に入るということもあって、本気になって真剣に楽しむ水高生らしい姿が毎年そちらこちらで見られる。



進路状況の変遷

九〇周年まで

本校では入学時には全体の八〇%以上が国公立大学への進学を希望しているが、実際に国公立大学に合格しているのは全体の四〇%前後である。

当時も経済不況を反映して全国的には「私大離れ、地元国立大志向」の傾向が強まっていたといわれていた。しかし平成七（一九九五）年以降、岩手大学への志願者数・合格者数は減少傾向を見せ、本校の場合は逆に「地元国立大離れ、私大志向」の傾向が見られるようになってきた。



きた。

この前半の一〇年の中で特筆されるのは、国公立大の合格者数（現役実人数）が一五三人を記録した平成四（一九九二）年入試である。

「昨年度の国公立大入試は第二次ベーパーム（昨年度の国公立大入試は第二次ベーパームのピーク、分離分割方式の激増という二つの要因が重なり、史上最大の激戦と言われました。水高は職員・生徒の一致団結した頑張りです。センター試験を好成績で突破し、二次試験も乗り越え、史上最高の成果を上げました。中でも東北大学合格者は二二名（現役一九名）で岩手県内のみならず、東北地方でも有数のもので特筆すべき快挙であったと思われます」（平成四年七月二〇日発行PTA会報「飛龍」）

その後も一〇〇名以上の国公立大合格者数を維持し、併せて私立の難関校への合格者も多数出し続けた。

九〇周年以降

やはり、経済不況の影響が強く、九〇%以上が国公立大学への進学希望となっている。平成十年台中頃以降は、国公立大学入学者が半数以上を占めるようになり、私立大学志望者が激減している。その結果、私立文系クラスも平成一八年度を最後に独立クラスが消滅し、私立大学専願志望者は従来の国立文系クラスの中に在籍しながら、選択授業によって対応せざるを得なくなった。

国公立大学入試も、AO入試、推薦入試、一般受験など様々なタイプがあり、その内容も、

記述学力試験や小論文、口頭試問など多岐にわたって、多様な能力の学生を求め入試へと、徐々にその傾向を変えてきている。本校の進路指導もそのような入試に対応すべく、全職員と生徒が密に連携しながら成果を上げてきている。出願先も北海道から沖縄まで全国規模で展開している。

この後半の一〇年間も年々国公立大学合格占有率が上がってきているが、その中でも特筆すべきは、平成二一年度卒業生の六〇%を越える人数（一七二名）が国公立大学に合格していることだ。岩手県全体でもなかなか出ない東大理科Ⅲ類への現役合格など、着実に水高生はその真価を発揮してきている。今後も志望校全員合格を目指して、学校が一九となって精進を重ねていってほしいものである。

施設・設備の充実

平成二（一九九〇）年の創立八〇周年記念事業の一環として同年に建設された八〇周年記念館「志学館」は、収容人員三〇〇人、学年全員が入れる冷暖房完備の講堂があって、大学進学講座、課外授業をはじめ、講演会、学年集会等に利用され、自学自習室では勉学に励む生徒たちの姿が絶えることはない。

平成七（一九九五）年には部室が一新され、翌八（一九九六）年にはトレーニング場が新設された。平成一〇（一九九八）年からは校舎の大規模改修が行われ、平成一二（二〇〇〇）年

にはセミナーハウスの建設が予定され、勉学、部活を維持発展させる施設、設備の充実がさらに進んだ。また、平成二〇年の岩手宮城内陸地震の際、本校でも理科室の設備が一部破損するなどの被害があったが、それを受けて平成二一年度には校舎教室等の耐震補強工事も行われ、安全面でさらに強化された。

また、この度の創立百周年記念事業として「昇龍館」屋内運動場が建設された。文武両道を標榜する水沢高等学校には、学習環境のみならず部活動振興の設備も充実し、今後より一層の生徒諸君の活躍が期待される。

未履修問題に揺れた水高

平成一八年一〇月二四日に富山県立高岡南高等学校に端を発したこの未履修問題について、全国の高校で同様の問題が隠されていたことが瞬く間に暴き出された。岩手県でも二日後の二六日には岩手日報で県内の主立った進学校が未履修問題を抱えていることを報じている。当然水高もその渦中で、学校内外が大いに震撼した。まず、この未履修問題とはそもそも何なのかについてまとめておこう。正式名称は「高等学校必修科目未履修問題」といい、必ず履修（授業を受講すること。因みに一単位は五〇分×三五回受講すること。）しなければならない教科・科目の単位を、履修しないままに認定して進級させたり卒業させたりする問題である。

平成六年度の入学生から、高等学校「社会科」

は「地理歴史科」と「公民科」とに再編成され、地理歴史科では世界史が必修で他に一科目（日本史または地理）が必修、公民科では現代社会一科目または倫理と政治経済の二科目が必修となった。また、地理歴史科の各科目ではA科目（二単位）とB科目（四単位）が設定された。例えば、地理歴史科では、世界史A（二単位）と日本史B（四単位）を選択すれば未履修とはならない。ところが現実には、問題となった学校では、例えば生徒に日本史Bを六単位履修させておいて、記録上は世界史Aと日本史Bを履修したことにしてしまうという操作を慣例的に行うという状況であったのだ。何故このようなことが行われてきていたのか。一言で言えば、進学対策のためである。地歴B科目は四単位履修であるが、本当に四単位で教科書を終え、受験に対応できる学力を身につけることができるかというと、学校現場では事実上無理であった。結局単位数を増やしなければ現実的には進学希望者の学力を高めることができないのであった。これは、水高に限ったことではなく、多くの進学志望者を抱える学校共通の問題でもあったのである。岩手県内の各学校でも、また全国の多くの学校でそれぞれ表向きのカリキュラムと現場で実際に履修させるカリキュラムとのずれがあったのだ。

本校の状況はどうであったかというと、平成一四年からの五日制実施以降、理系の二、三年生の地歴科目で次のような未履修の問題があった。

公表するカリキュラムでは、二年次にB科目一つを三単位履修し、三年次に二年次から継続のB科目一つを一単位履修した他にA科目一つを二単位履修するとしていた。これは問題のない履修となる。しかし実際には、三年次に二年次から継続のB科目を三単位履修し、A科目は履修しないままB科目の成績をA科目の評価に流用するという操作を行ってきたのである。その結果、理系生徒が未履修の被害を被ることになってしまったのである。

この問題を解決するため、学校では文部科学省・県教育委員会からの指導通達に従い、正規の履修をとり進めることとなった。ただ、三年生にとっては、いよいよ受験体制が本格化している時期だけに、校長が先頭に立って生徒への説明と保護者への説明を丁寧に行った。そして特にも受験にとって不利にならないよう万全の配慮をして、A科目の履修を実施した。ただ、幸いしたのはA科目というのは、指定された特定の内容を履修するものではないので、授業者が指導内容を工夫することで、受験生にとって大きな違和感を持たずに受験科目と関連づけて学習できたことで、受験に大きな支障はきたさなかったと言えよう。

インフルエンザに揺れた水高

平成一八年度、二一年度には水高もインフルエンザにより学校閉鎖や学年閉鎖などの措置を執らざるを得ないほどの猛威をふるった。

追う毎に徐々に増加し、一〇月末から一一月の初めにかけて、罹患者と疑わしい者との数が約五〇名へと一気に急増した。それも一・二年生が中心で、特に二年生が間もなく修学旅行でもあり、この勢いが収まらないと修学旅行の変更・中止の決定が迫られている時期でもあった。そこで一二月二日に一・二学年閉鎖を決定し、朝のSHR終了後直ちに帰宅させた。二学年はそのまま一月八日まで学年閉鎖とし、一学年は二組を除いて一月四日には解除となった。

一年二組だけは、二学年同様一月八日までの学級閉鎖措置となった。そのおかげか、翌週の一月九日以降は流行も下火となり、二学年の修学旅行も予定通り一月三〇日に出発できたのであった。

この時期三年生は受験勉強がまさに最盛期の頃で、三年生に流行が拡大しなかったのは不幸中の幸いであった。三年生は予防接種を早めを受けていた者が多かったのも幸いしたのであるが、やはり勝負がかかっている緊張感のなせる技であったのかもしれない。二学年は出向日数不足を補うために、一二月末の終業式後、二四日と二五日は出校日となったのであった。

生徒会活動

「伝統」の存続に揺れる

平成三年度以降の主だった生徒会活動を列記してみよう。

平成三（一九九二）年度は特に目立った動きはなく、平成四（一九九三）年度には、基軸交流会と銘打った他校との交流を始め、翌平成五年度も継続している。

この基軸交流会は、生徒会の代表たちが学校生活や応援団活動などをテーマに情報交換しあうもので、平成四年度は盛岡三、花巻北、黒沢尻北、一関一の各校と、また平成五年度は一関一高と交流を行った。

平成六（一九九四）年度には、後期生徒会活動案の否決という事態に陥った。平成七（一九九五）年三月発行の生徒会誌『みずこう』に及川瞳副会長は、「否決された直後は、（どうしてなんだ）なんて思っていたが、今になってあの活動案を読み返すと、イメージだけで、あまりの具体性の無さに、当時一生懸命考えたはずである私も驚く」と記している。

平成七（一九九五）年度に生徒会会報である「ニコちゃん会報」を発刊した。目安箱的な目的で「ニコちゃんポスト」も設置している。この年運動会の棒倒しについて、危険性が指摘され、ルールの改正が行われた。

- 一 ヘッドキャップの着用
- 二 せみの禁止（守備長にかわる）
- 三 反則者は一時退場（ペナルティーエリアの新設）

文化祭（飛龍祭）は三年に一回一般公開で行われていたが、平成一〇（一九九八）年度校舎

平成一八年度は年度初めの四月に流行した。市内の小学校などで流行していたようだが、ちょうど本校は応援歌練習の時期に重なって、一年生が大声で歌いながらお互いに打つし合いをして、それが一気に全校に広まってしまったらしい。

この年は四月一日から応援歌練習が始まり、その時点でインフルエンザで出席停止の生徒は全校で三名しかいなかった。それが応援歌練習が続く中で一日にはインフルエンザの出席停止が一四名、土・日の休みを挟んで一七日には五八名と爆発的増加。この時点で応援歌練習は中止し、翌日一八日の入団式も全校が集まるとさらに蔓延の恐れがあるので延期が決定された。しかし、応援歌練習を中止したぐらいでは収まらず、一八日には八五名の出席停止。一九日は一〇〇名の大台に乗ってしまった。その日の午後には一学年を学年閉鎖した。この時点で二・三年生の出席停止は三十数名であった。ところが翌二〇日には、二・三年生だけで五一名の出席停止、その他発熱気味で登校したものの多数で、ついに学校閉鎖ということになった。

幸い、翌週二四日からは罹患者が激減してインフルエンザも終息したが、高総体地区予選直前のことでもあり、生徒たちも随分と心配したものであった。また、応援歌練習や入団式もずれてしまっ、かなり学校行事には支障を来してしまっ。

平成二一年度もかなり校内的に揺れた。一〇月上旬にぼつりぼつりと出始めた罹患者が日を

大規模改修、一一年度はインターハイにより中止となり平成一二（二〇〇〇）年度に五年ぶりで開催された。

バンカラ応援団にエール

平成八（一九九六）年度には制服改正のアンケートが実施された。

同年応援団検討委員会が発足し、平成九（一九九七）年度にはバンカラ応援団の廃止が決まったが、翌年には復活した。

バンカラ応援団については、雑誌で取り上げられてもいる。

それにはこうある。
一 情報が全国均一化をみせる今日、バンカラの消える日も近いと心配する地元の声もある。各校のOBたちも口をそろえて自分たちの時代のよさを力説する。

一 今の学生のバンカラはファッションで、旧制高校のような実質を伴っていないと大人の声も彼らに届く。しかし、心配しなくていい。旧制二高を卒業された水沢高校の校長先生は、「自分たちの時代も実質はありはしなかった、それは今の学生と同じように、先輩に対するあこがれからバンカラを始めたのだ」と言ってくれた。

と記し、「みちのくのバンカラたちよ、君たちが最後のバンカラであって欲しくはない。誰もが街の風景のように愛する君たちの姿は、先輩が力強く残し、伝え続けてきたものだから」と、バンカラ応援団にエールを送っている。

全国に水高の存在を示す文化部

文化部の活躍は全国レベルのものが多く。

まず、平成五（一九九三）年に行われた第三七回読売新聞日本学生科学賞県審査で科学部地学班の「マグマの冷却調査」が最優秀賞に輝いた。全国審査でも二等に輝いている。

これは、火山噴火報道に触発された班員たちの間で火山を調査したいという意識が芽生え、身近に位置する秋田駒ヶ岳に研究対象をしぼって調査したもの。

秋田駒ヶ岳は、昭和四五（一九七〇）年から四六（一九七二）年にかけて溶岩噴出を伴う激しい活動をしている。平成四（一九九二）年秋と翌五（一九九三）年夏の調査によって、活動を解析し、噴火から休息までの活動を終えつつあり、火山活動は終息するだろうという結論を導き出している。

マグマをモグラに例えて、校分かれしながら冷却する過程を「モグラたたきモデル」と名付けるなど、ユニークさも目立った。

平成九（一九九七）年に行われた第四五回全国高等学校家庭クラブ研究発表大会のホームプロジェクトの部で、家庭クラブの研究「ぼくの食文化へのチャレンジ」が文部大臣賞を受賞した。あわせて、平成九（一九九七）年度県はばたき賞も受賞している。

七人家族の家庭の食生活の実態を調査したもので、実際に食生活の改善につなげた、まさに「チャレンジ」の実践テーマが評価されたよう

である。

さらに、全国的に評価されている部に吹奏楽部がある。

平成八年度吹奏楽コンクール県大会金賞受賞の演奏が評価され、翌平成九年度全国高等学校総合文化祭（奈良県）への派遣となった。水高吹奏楽部としては二度目の快挙である。

もちろん、全国水準の演奏を間近に見聴きする機会を部員たちは手にし、大いに喜んだのだが、ただ、快拳のきつかけとなった演奏の中心である三年生が出場できなかったことは残念なことであった。県大会で彼ら三年生部員が流した涙、後輩に託す思いは、決して忘れることのできないものである。

そして翌年の八月、炎天下の奈良文化会館国際ホールで、その思いに十分応える演奏を披露したのだった。

囲碁・将棋部の活躍も目覚ましい。その歴史は、平成七年度の生徒総会で同好会から昇格し、「部」として承認されて以来四年を経過したばかりだが、いまでは県下のみならず東北、全国にその名をとどろかせている。

全国誌『棋道』に、本校第五回生の八幡和三郎氏、青木昭氏、佐々木実智男氏らの水沢高等学校囲碁熱中グループ（昭和二八年卒）が写真掲載され、紹介されたが、本校の囲碁・将棋の伝統は、同好会へ、そして部へと脈々と受け継がれて今日に至っており、県下囲碁・将棋界では、水高が出場するときは恐るべしという風評をつくるまでになった。

特筆すべきは、平成五・六年度の個人戦を征した高橋浩樹、平成八・九年度の高橋隼人の兄弟囲碁で、ことにも高橋隼人の囲碁は「大石取りの水沢高校」と東北大会では評判だった。平成一九年度には将棋で田内遼が岩手県高等学校将棋大会で優勝し、全国高校将棋竜王戦で五位に入るなど大活躍であった。現在の囲碁・将棋部は、そうした伝統を踏まえつつ日夜勉強を重ねており、必ずや伝統を恥ずかしめない成果をあげるものと期待が膨らむ。

このほかに美術部、写真部、短詩同好会なども全国大会へと名を連ねることが目立っている。詳細は部活動の紹介の頁をご覧いただきたい。

また、部活動とは別に個人として取り組んでいたものの中で特筆すべきものがある。平成一八年度U二〇（二〇歳以下）プログラミングコンテストでプログラム言語「Spinell」（スピネル）を開発した高橋平が全国最優秀賞となった。